

【4月の気象】

4月の季語は、「桜」「春眠」「長閑」「穀雨」などがあり、冬から春になり暖かく、長閑で過ごしやすい季節になります。また、様々な植物が芽吹き花開くころです。当台で観測している道後公園にある標本木の桜は3月に開花（平年3月24日）し4月に満開（平年4月3日）となります。

松山市の4月の平均気温の平年値（1991～2020年）は「14.8℃」ですが、上旬から下旬にかけて3.2℃上昇し、寒暖差が大きくなります。

低気圧が3～4日の周期で西日本を通過するようになります。低気圧が日本海を発達しながら東へ進む場合、南よりの強風が吹きやすく、低気圧からのびる寒冷前線が通過する時には、突風、竜巻、激しい雨、降ひょうなど激しい現象が起きることがあります。また、移動性高気圧に覆われて晴れた朝は、放射冷却現象によって気温が低下し霜が降りることがあり、農作物の管理に注意が必要です。

さくらの開花日、満開日

	開花日	満開日
2024年	3月27日	4月5日
2023年	3月18日	3月28日
2022年	3月21日	3月28日
2021年	3月15日	3月27日
2020年	3月25日	4月9日
平年	3月24日	4月3日

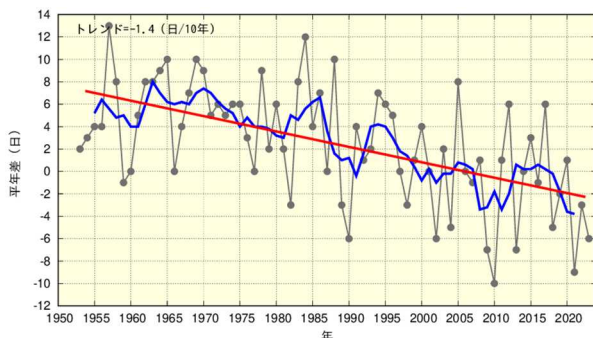
【気象用語】「さくらの観測」について

松山地方気象台では、さくらの開花・満開の観測を行っています。さくらの観測は標本木を定めて行っており、現在は道後公園（1980年から）にあります。道後公園の前は気象台構内にありました。

1953年から2024年までの観測では、松山のさくらの開花は、10年で1.4日開花が早くなっています（第1図）。これは、地球温暖化の影響で春の気温が高くなり早くなっていることが考えられます。では、このまま、地球温暖化が進めば、さらに開花が早まり、3月上旬、2月に開花と早まるのでしょうか。

そういうことは無さそうです。地球温暖化が進めば、さくらの開花が遅くなり、一部の地域では開花しないところも出てくるという研究があります。なぜ、温暖化が進めば、開花が遅れるかということ、さくら開花のプロセスが関係してきます（第2図）。さくらは春の開花後、夏の時点で花芽が育成されます。そのまま成長すれば冬に開花ということもありますが、さくらとしては花が咲くのは春だけで良いため、初冬に成長を止めます。これを「休眠」と言います。冬になり強い寒さにさらされると目が覚め、春に向け花芽の成長を開始します。これを「休眠打破」と言います。近年は地球温暖化の影響もあり、冬の気温も上昇しています。このため、「休眠打破」に必要な寒さが足りず、「休眠打破」のタイミングが昔に比べ遅れ、また、「休眠打破」自体がうまくできないということが考えられます。休眠打破が遅れるということは、花芽が成長を始めるタイミングが遅れることで、いくら3月の気温が高くなっても開花は遅れます。地球温暖化が進めば、さくらの開花が遅くなるということになります。

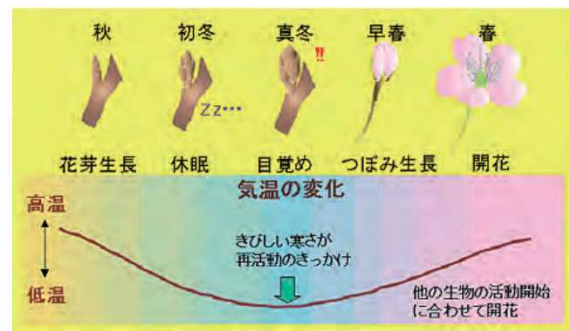
今回は、さくらについて記述しましたが、これは他の植物にも同様です。農作物等でも開花、発芽のために冬の寒さは重要です。



第1図 松山のさくら開花日の経年変化（1962年～2024年）

黒線：各年の開花日（平年差） 青線：5年移動平均

赤線：変化傾向



松江地方気象台HPより

第2図 さくら開花のプロセス